

ロマン・インガルデンの文学 理論の成立事情とその意義

金 田 晋

日本における文学研究者のおおかたはロマン・インガルデンの名をウェレクとウォレンの共著『文学の理論』の中ではじめてお目にかかったのではないか。そこではほぼこのように紹介されている。すなわちインガルデンの『文学的芸術作品』(R. Ingarden: „Das literarische Kunstwerk“)は、旧来の文学理論のように文学作品をなにかひとつの規範、原理——それが作家の体験であれ、読者あるいは批評家の印象体験であれ、はては作品を決定する格率であれ——に還元するのではなく、文学作品を異質な四つの層からなる多層的構築物とみなそうとした。だがそれは「価値に言及することなく芸術作品を分析しようとした」(p.156) 点で満足のゆくものではなかった、と。つまりかれの理論は作品の価値問題をあつかった『文学の理論』に重要な示唆を与えこそすれ、そこに克服されてゆくひとつの仮説的作業にすぎなかったということになる。また日本において文芸作品をその言語的所産という面から考察する可能性を拓いた竹内敏雄博士も、その著『文芸学序説』の中でインガルデンの理論を高く評価され、学説史の中で扱うものとしては比較的詳しく紹介されておられる。また『文学の理論』にくらべて、インガルデンの哲学的意図であった現象学的思想についてもふれておられる。が氏もまたインガルデンの書を特殊美学的・文芸学的側面からのみ評価されようとする傾向がある。そのため、批判的結論として、「最初から価値美学的問題を棚あげしてかかったインガルデンの立場では、美的対象本来の問題が疎外されるのも止むを得ないことであろうが、美学の見地からいへば、かやうな客観主義的作品論だけでは芸術と

しての文芸の本質について満足は解明をあたへることができない」(341頁)とされる。

これら代表的なインガルデン評価にみられるように、従来の客観的な規範的作品論にも主観的な印象批評や象徴主義批評にもあきたりなかった多くの研究者たちにインガルデンの論は多くの示唆を与えながらも、文芸学上正当な位置を与えられてこなかったとってよい。たとえば1953年に出版されたエリック・ルンディングの『芸術解釈への道』と題されるドイツを中心とした文芸学史的論文にもインガルデンの名は見出されない。近年かれが評価し直される気運が起ったのは、たしかにフッサール現象学の再評価とロシヤ形式主義運動の評価に負うところが多いように思われる。それではなぜインガルデンの書はこのように非運をかこたねばならなかったのか。

1. インガルデンの思想的略歴と『文学的芸術作品』の出版

『文学的芸術作品』が出版されたのは1931年である。だがかれはこの論文を1927年から28年にかけての大学の冬休み中に完成している。インガルデンの『フッサールの回想』によれば、このころのかれの足跡はつぎのように記されている。「1927年秋私は数ヶ月間外国に行けるだけの奨学金を得た。私はもちろんなによりもまずフッサールのもとに赴いた。私は2ヶ月間フライブルクに滞在し、それから6週間マールブルクに遊び、12月中旬パリに出発した。1928年3月末私はシュトラスブルクを經由してフライブルクに行き、そこでフッサールのもとに数日間滞在し、それからレムベルクに帰った。この数ヶ月の間に私は『文学的芸術作品』を脱稿した」(Husserl: Briefe an Roman Ingarden, S. 135)。さらに1928年3月の数日間のフッサール訪問のころをこう回想している。「今度は私は3日間だけフライブルクにいた。私はフッサール宅に宿泊したので、ほとんど終日一緒に過ごすことができた。だがフッサールは新たな招待を受けて今度はオランダに行くことになっていて、新しい講演の準備をしなければならぬ

ことがわかった。だから私がいることはかれを妨げることになった。それにもかかわらず私はフッサールに、パリで書下していた論文『文学的芸術作品』の草稿を見せた。かれは全体に眼をとおすために、2日間をまるまるさいてくれた。この書についてのかれの判断は私にとってきわめて重要であった。私はこの書物のニーマイヤ社からの出版にかれが助力してくれることを期待していたからである。フッサールは早速、すぐにニーマイヤに私の著作の推薦状を書こうとってくれた」(ibid., S.159)。もっともフッサールはインガルデンのこの著書全体に賛同したわけではなかった。わけでもインガルデンの超越論的理念論についての所説には反対で、著書からはすようにさえ示唆している。事実フッサールはインガルデンの思想を「存在論主義 (Ontologismus)」と批判している (ibid., S.165)。それでもニーマイヤへの推薦状はともかく書いてくれた。だがニーマイヤとの交渉はそれほど順調には進まなかったらしい。「私の原稿の最終稿の印刷はなかなかはかどらなかったので、この書物を2部に分けて『現象学年報』に掲載してもらえないかどうか、フッサールに問合せた。だが私はこの計画を断念した。既にそのときこの原稿の主要部分の準備だけはともかく終りかけていたからである。私は<付録部分>の出版をあきらめて1930年8月1日にニーマイヤ社宛てにタイプ原稿を送った」(ibid., S.164)。

ここにひとつの問題がある。つまり現象学の方面におけるかすかすの労作を掲載してきた『現象学年報』に、インガルデンがなにゆえはじめからこの論文の掲載を意図しなかったのか、という。しかしおそらくこれはフッサールやインガルデンその他の個人的事情がまつわってくる問題であり、そこをわざわざ詮索する必要もさしあたっては見出されない。

ともかくインガルデンはニーマイヤと23ボーゲン分の出版契約を結んでいた。だがかれが出版社に8日に送り届けたタイプ原稿は25ボーゲンにのぼる大部のものであった。しかもインガルデンは1928年春に他の芸術ジャンル、すなわち音楽、絵画、建築、映像についての論文をも脱稿し、これらを『文学的芸術作品』の<付録>として出版することを望んでいた。ニー

マイヤはこの〈付録部分〉の出版を別の機会に延期させて、漸く1930年12月に論文の主部だけを出版した。そしてこの〈付録部分〉のドイツ語版は1962年になってやっと同じニーマイヤ社から『芸術の存在論的考察』（„Untersuchungen zur Ontologie der Kunst“）という題で出版されるが、この出版の遅滞は裏をかえしていえば、『文学的芸術作品』自体が一部の専門家をのぞけば、あまり注目されていなかったことを暗示しているだろう。

だがニーマイヤ社はインガルデンの書の出版に加えた制限条件は、なにもこの書の非大衆性のためだけではなかった。ちょうど1929年ごろから世界を覆った経済恐慌はドイツにおいてもことさら深刻なかたちで社会を混乱の淵に投げこんだ。出版業界にも紙不足というかたちでそれは波及した。だからニーマイヤ社にしてみれば、23ボーゲンを25ボーゲンにまで譲歩するだけでも相当の勇断を要したであろうし、付録部分を加えて600頁にもものぼる全文を出版することは思いも及ばぬことであったと思われる。当時の社会情勢は、ポーランド系の無名の哲学者のしかも難解な文章をうけいれることを困難にしていたといえる。なおここで出版直後インガルデンにあてたフッサールの書簡（1930年12月21日づけ）を紹介しておこう。

「親しい友へ。

心からの感動と喜びをもって私は貴君の厚情の11月15日づけの便りを読みました。私がしばしば老境の孤独、それは学問的にも個人的にもいえることですが、について愚痴をこぼすとすれば、それは忘恩にすぎるように思われます。私には貴君のような弟子であって友人がいるのですから。私は、返信をとどこおらせているときですら貴君が私にいつも便りしてくれることを有難く思っています。貴君の便りは佗住いにある私には喜びであり、欠かせぬものです。私はキアヴァリから帰って……一生懸命仕事をしましたし、また一切の妨害を遠ざけておかねばなりません。昨日はじめていわば時計がまわり終わりました。つまり私の中で形成されることをのぞみ、またそうあらねばならなかった思索が一めぐり行われました。

その間に貴君の二番目の便りと美事な書物が届いておりました。私は貴君がこのように困難な情勢の中で、これほど制約された研究時間の中で、はかりしれない障害にもめげず、このように深く透徹した作品を書くことのできた精力ぶりに感心しております。貴君の誠実さと才能に対する私の全面的信頼が貴君に対してなほどうかの意味をもっていたとすれば、うれしいことです。しかしとにかく貴君は学生のときからこの私の判断の正しいことをいつも、そしてますますはっきりと確証してくれました。この新しい書物によって、私は最初眼を通したとき確かめられてうれしかったことですが、貴君はまた一段飛躍することでしょう。私にとってそれは格別の満足事であり、誇りであるといわせてもらいたい。というのもいつものことだが私は、自分にはほんとうの意味での共同研究者がいない、とりわけ私の考えていることを先取りしてしまうような弟子がいないと不平をこぼしてきました。この書物の文章全体は、といっても存在論的側面にかぎってのことですが、ひとつの先取りであるように思われます——そのことは既に1929年、貴君が第1草稿を私に聞かせてくれたとき、そしてその目次を見たとき、大体のところ察しがついていたことですが。しかしながら今私はもっと詳細に読んでみたくてたまりません。私はこの休暇中に貴君の作品を精読することにします。——実際それは私にとって最高に悦ばしいクリスマスの贈物です」(ibid., S. 61-62)。もっともそうだからといって、先へのべたように、フッサールはインガルデンの所説を全面的に先取りされたと思っていたわけではない。かれは同じ書簡の中で、当時ほぼ完稿していた『デカルト的省察』がまだ出版されていないために、多くの現象学徒の間に種々の専断や曲解がまかりとおっていると指摘し、それも自分の責任だと語る。「親しい友よ、貴君もまた残念なことに貴君流の存在論を確信している。だが私は、貴君の精神がなお新しいものに許容力をもち、原理的なものの中でみづからを鼓舞して、もう一度懐疑的になり、＜確実なもの＞をもう一度括弧にいれ、エポケーの中で新たに思索しぬくつもりであることを願ってやまない。もう一度自由の流れの中に身を置こうとし

てください」(ibid., S. 63)。

ともあれインガルデンにとって、フッサールは最高の理解者であり、最大のたよりであった。だが1932年末ナチスが政権を握ると、フッサールはフライブルクの教授職とワイマール共和国の枢密顧問官の役を追われ、かれの著作のドイツ国内での出版は禁止される。フッサールは1938年他界し、そのあとに遺された膨大なマヌスクリプトと蔵書は、ナチスの眼を盗んでヴァン・ブレダ師がベルギー大使館を通じてルーヴェンに運びだした。大戦中は、こうしてドイツではフッサール現象学は影の世界におこまれることになった。戦後しばらくの間も現象学はハイデガーの実存哲学の屈折をうけてしか紹介されてこなかった。フッサールのフライブルク移住以前の思想を継承せんとしたインガルデンの論著もまた、陽の目をあびるには長い冬を経験しなければならなかった。

だがそうした政治社会経済それに文化情勢だけがインガルデンの論説の普及を妨げたわけでない。インガルデンはポーランド人である。かれは1912年ルヴオフ大学(ポーランド)からゲッチンゲン大学に留学、そこでフッサールを知る。1925年32才で故郷ルヴオフ大学で哲学の私講師に就任、1933年から41年まで同大学教授。41年ナチスのポーランド侵入のため、45年まで教職追放。45年ルヴオフはロシアに譲渡されたため、クラカウ大学に移り、そこで哲学の主任教授となる。その生活は1970年6月14日当地で急逝するまで続いた。こうしたインガルデンの経歴からも明かなように、かれは学的活動期の大半をポーランドで過したといえる。だからポーランド語で執筆された論文、論著はほぼ百冊にのぼるといわれるのに、西欧語で書かれたものは、学会での講演録、書評を含めてわずか30数種にとどまる。そうした言語上の制約もまた見逃すわけにゆかない。

またそのポーランドにおいても戦前は新実証主義がワルシャワを中心として哲学界の主流を占め、戦後はマルクス主義哲学が公的位置を占めた以上、現象学的存在論の立場をかえないインガルデンは、つねに傍流たらざるをえなかった。この間の事情をマックス・リーザーはこのように伝えて

いる。「かれ(＝インガルデン)は、芸術の認識論を現象学的用語法に依拠した概念を用いて、現象学的存在論を基礎とし、そこから導き出そうとする、美学の新しいかたちを追求したポーランドでは最初のひとであった。これらの条件はポーランドではある程度変化した。かれがきわめて精力的に論難していた新実証主義はその支配的地位を失い、かわってマルクス主義が登場した。かれが反対していた戦前の心理主義はブルジョワ色が強かったので、現象学の位置づけもある程度変わった。もっともマルクス主義者たちが現象学を非難することにかわりなかったが、だごとにかく新実証主義がはるかに影響力をもっていたために、マルクス主義者の敵意はまずそこに向けられた。インガルデンは外的事件にあまり鋭敏に反応しなかった。かれは哲学的問題への国家の干渉に反対であったが、沈黙していた。戦後ポーランドではかれの美学への関心は急速に高まった。かれは2、30年代のポーランド哲学の盛期を伝えるひとにぎりの継承者のひとりとなった」(Max Rieser: Roman Ingarden and His Time, p. 445)。要するにポーランドにおいてもインガルデンへの関心は一部の専門家の間にかざられていたといえるだろう。

さらにインガルデンの書自体のもつ晦渋さもあげられなければならないであろう。かれの『文学的芸術作品』のほんとうの狙いは、哲学上永遠の対立ともいえる観念論対実在論(あるいは理念論対実念論)の対立を克服するため、志向的対象性(intentionale Gegenständlichkeit)という現象学的領域をきりひろくことにあった。だからかれのこの書の意図は美学と文芸学の領域だけにかざられていたわけではない。実際多くの批評家が指摘するように美学や文芸学においてはさして重要とは思われない問題に、インガルデンはきわめて多くの頁数を費している。それにもかかわらずかれはこうした現象学的テーマを検証する場として芸術作品を選んだ。だからかれは特殊美学的文芸学的諸問題にもいろいろ詮索することを怠らない。つまりインガルデンの書は哲学的意図と美学的意図とを両天秤にかけることからくる晦渋さを当然負わねばならなかったといえよう。

とすればなにゆえいまインガルデンの思想が復権する気運にあるのか。そのひとつにフッサール自身の現象学が改めて注目されはじめ、共同主観性 (Intersubjektivität) に基づいた現象学的存在論の可能性が追求されはじめたことがあげられよう。従来フッサール現象学は意識の現象学としてとらえられ、その存在論的側面はハイデガー的存在論に委ねられる解釈が多かった。だがフッサールの遺稿がフッセリアナとしてつぎつぎに公刊されてゆく中で、ハイデガー的存在論とは相を異にした現象学的存在論の輪郭が少しずつ鮮明になってきた。だがそれと同時に記号・意味の領野もこの共同主観性の側面から新たに問い直されはじめた。『論理学研究』の延長線上でフッサール現象学を摂取せんとしたいいわゆるゲッチングゲン現象学派の仕事も徐々に再評価されはじめている。終生フッサールに師事した修道女エディト・シュタインがアウシュビッツの収容所で虐殺されたのち、このインガルデンはゲッチングゲン時代のフッサール思想の面影を伝えられるただひとりといってよいほどの生証人であった。

インガルデンが一貫してもちつづけた関心は、博士論文 (『アンリ・ベルグソンにおける直覚と叡知——その記述と批判の試み』 („Intuition und Intellekt bei Henri Bergson“. 1921)) を準備していたときから、外部知覚と、これに関連しての構成の問題であった。そこからかれは『イデー』第1巻において展開されることになる意識の超越論的構造によっては不明確ならざるをえないアポリアを発見する。つまりフッサールは構成された対象性がまさに構成されているその方式、根拠を、それに対応する意識多様性の中で跡づけようとするが、さてここで構成されたXとはなんであるかが依然として不明のままである。この構成されたXを考察するためには、もちろん超越論的視角の必要であることはいうまでもなく、Xが構成される上での意識多様性を、すべての可能な意識多様性の面から明かにせねばならない。だがそれと同時にこの意識多様性が選択した質料の面からそれが構成されてゆく過程と他のなにものにも解消しえないその特権的構造とを明かにすることもまた必要である。この後者の面が、フッサー

ルの超越論的方法によっては不鮮明になる、とインガルデンは批判している（E. Husserl : Briefe an Roman Ingarden, S. 166参照）。

こうしたインガルデンの問題提起は、単にフッサールの忠実な解説者にとどまるものではなく、フッサール自身が終生念頭を離れなかったアポリアを新たな存在論的地平において把え直そうとする試みであった。それは現代においてなお新鮮な問題提起であるといわねばならないであろう。

だが他方美学・文芸学の方面でも新たな模索がはじまっている。1930年当時、インガルデンが『文学的芸術作品』を出版した当時、いまだ文芸作品は言語的芸術作品であるという基本観点が定着せず、デイルタイのように生の哲学に基く世界観の表出として文学を扱ったり、あるいはワルツェルのように形式美に重点を置いて作品分析を企図したり、さらにはシュトリヒのようにヴェルフリンの美術史論を文芸学に應用して対概念設定による様式史論を説こうとしていた。かれらはいまだ文芸作品に内在する本質構造を対自化せんとする自覚に欠けていたといえる。既にロシアを中心とした形式主義の運動、英米のニュークリティシズム等があったが、ドイツにはその哲学的閉塞性とあいまってこうした諸外国に芽生えた文芸論はなかなか定着しなかったといえる。今日では、「言語的芸術作品」という思想は文芸学の基本的テーゼとして承認されつつあるように思われる。だがそのテーゼをどのように分節し構造化してゆくかという点では、諸説あいみだれている現況である。（ドイツ文芸学の現況については、拙文『文芸学における解釈の問題』参照）。ドイツ文芸学史の中では孤島の観すらあったインガルデンの論説がこうした状況の中で改めて見直されはじめたとしても、さして奇異なことではないであろう。

インガルデンは文学を研究するには二つの方面から行わなければならない、と考えている。すなわちひとつは「研究ないし認識されるべき当のもの、つまり文学的芸術作品がどのように構築されているか」という文学的芸術作品の構造、もうひとつは「究極的には文学的芸術作品の認識に向う作品のとりあつかいかたとは本質的にどのようなものか、換言すればこの

芸術作品を認識することがいかなるかたちで行われ、いかなる点に進んでゆくべきなのかという作品認識のありかたの面である」(D. I. Kw., S. 2)。その前者の問いに向けられたのが『文学的芸術作品』であり、後者の問いをうけて書かれたのが『文学的芸術作品の認識について』(„Vom Erkennen des literarischen Kunstwerkes“)という著作である。この2冊はインガルデンの文学論の上で緊密に結びついている。ただ後者は1936年ポーランド語で書かれ、西欧の文芸学界では話題にのぼらなかった。戦後ドイツの文芸学界では、エミル・シュタイガーの実存主義的、解釈学的方法が人気をえた。インガルデンによれば、シュタイガーの『解釈の術』は後者の問いへのひとつの応答であるにはちがいないが、「文学的芸術作品の層構築をほとんど念頭に置いておらず、しかもかれの理論的部分もあまり概括的で、文学的芸術作品の認識の重要な根本問題へ透徹しているとはいえない」(V. E. d. E., S. 2-3)。またフランスのヌーヴェル・クリティックも、文学作品の認識のしかた、理解のしかたに潜んでいる諸問題にたちどまって反省するというよりも、文学作品の多種多様の具体化の可能性を問うことに熱中している。そこにはロシヤ形式主義の影響が色こく残っている、とインガルデンは批判する。こうした現況の中で、かれ自身『認識』書が今日になっても有効な学的示唆を与えるものと考え、1967年その独訳を公刊した。

以上、いくぶん長々とインガルデンの『文学的芸術作品』の成立に関する種々の事情、その評価について触れてきた。それはインガルデン書の新しいアプローチの方法をも示唆していると思われる。つまり哲学的現象学の方面からだけとか、あるいは美学・文芸学的方面からとかといったふうに、一面的にとらえるだけでは、その書のもつ意義は半減することになる。むしろわれわれはこの両面の接点からもう一度かれの問題提起をうけとめるべきであろう。

2. インガルデンの現象学との出会いとフッサールとの学的交流

まずわれわれはインガルデンがフッサールの現象学にどのようにして出会い、その後どのような経緯をたどっていったかを概観することにしよう。そのことによって全体的現象学運動の中でのインガルデンの位置がある程度浮彫りされてくるであろうし、またかれの思想が決して孤立したのではなく、多くの現象学者の思想と分ち合うところの多いことが明かになってくるであろう。

1912年インガルデンはルヴォフ大学からゲッチンゲン大学に留学した。当時ルヴォフ大学にはトワルドフスキー学派が哲学科の主流を占め、とりわけその一部はラッセルやマッハの影響をうけてきわめて実証主義的色彩のこい雰囲気を醸し出していた。だがトワルドフスキー自身は一方でF. プレンターノを「単なる心理学者」にすぎないとしながらも、プレんターノと同じ意味での記述的心理学をも志向していた。このトワルドフスキーのすすめでインガルデンはG. E. ミュラーが心理学を担当しているゲッチンゲンに留学したのであるが、そのあまりに厳密な経験主義的で自然主義的態度にあきたらず、講義にも落胆した。一方この大学の数学科にはヒルベルトがいて、数学的諸問題についての最先端の考察が行われていたが、哲学的基礎づけの面で欠けるところがあるようにかれには思われた。そうした諸講義の中でかれは最初はなにげなしに出席していたフッサールの講義に感銘をうける。1913年にはフッサールのゼミナールに出席し、現象学に関心をよせるようになり、1913—4年の冬学期中にフッサールのもとで博士論文をまとめることの下承をえるにいたった。1914—5年の冬学期、インガルデンはウィーン大学にゆき、そこで物理学と数学を学んだ。1915年夏学期にかれはふたたびゲッチンゲンに戻るが、その秋病気のためポーランドに一時帰国。1916年2月、かれはみたびゲッチンゲンに赴くが、そこで師フッサールがフライブルクに転任したことを知り、師のあとを追ってフライブルクに直行する。1917年1月クラカウに帰るが、同年9月ふたたびフライブルクに戻り、フッサールのもとに博士論文を提出した。だがそのこ

ら既にフッサールは視力の衰えがすすんでいたもので、一章ずつインガルデンが朗読してきかせなければならなかった。もちろん問題点のある箇所はフッサール自身が直接眼を通したのであるが。その冬フッサールはフライブルク郊外のザイクにインガルデンの論文をかかえて退いたので、かれもそこにつきしたが、そこで冬休みを過ぎた。インガルデンはそのころを回想してこう語っている。「今あのころのフッサールとの会話の全体を想いおこすとき、私はその会話が実に内容的に充実していたというだけでなく、フッサールの重要な思想が目覚め、かれに一連の重要な諸問題に接近させることができた貴重な時間でもあったといわねばならない」(Husserl: Briefe an R. Ingarden, S. 133)。

ついでながらインガルデンはこのころのフッサールの研究生活のすがたをこう描いている。「私は一度かれがどれほど孤独に研究生生活をすごしているか、かれの書斎のガラス扉を通して見たことがある。そしてかれがかにも不安げに室内を歩きまわり、もどかしげに身ぶり手ぶりをくりかえしては、ときたま書机に坐って数語記したかと思うと、またふたたび立上って部屋の中を歩きまわるのを見た。まるでかれがなにかの行詰りを克服せんとしているかのように。かれは思索や直観が非常に高価なものであるかのような印象を与えた。会話においてはこうしたことは全くおこらなかった。かれはある程度自分の話しかけている相手の存在を忘れていた。聞き手の存在することはかれの邪魔にはならず、かえって反対にかれはある気楽さで、しばしば困難な問題状況の中では容易には見出せないようなことばや定式を見出していた」(ibid., S. 133)。

こうした環境の中でインガルデンはフッサールの数少ない気楽な聞き手のひとりだったといえる。かれの『フッサールの回想』によれば、フッサールはフライブルクでそれほど幸せだったとはいえない。たしかにフッサールの学的生涯において、1916年にはじまるフライブルク時代は現象学に新生面を拓くものであった。フッサールはこれまでとは全然ちがう哲学的環境の中で仕事を始めることになった。しかしこのフライブルクは、リッ

ケルトが1915年までそこに在任していたこともあって、新カント学派の中心地であった。フッサールが就任してきた1916年には、リッケルトはヴィンデルバントの跡をついでハイデルベルクに移り、その弟子たちも大半その後を追っていったというものの、それでも新カント学派的伝統がこの地を濃厚に染めていたといえる。インガルデンによれば、こうした雰囲気になじむためにも、フッサールの哲学はゲッティングゲン時代にくらべてその趣きを異にしなければならなかった。そのためここではフッサールは本質的に孤独であったという。『フッサールの回想』によれば、フッサールは1916年夏フライブルクに移住してきたエディト・シュタインとその春既にフライブルクにいたインガルデンの3人で、小さな「ゲッティングゲン・コロニー」(ibid., S. 12)を形成し、そこからのみかれの現象学的養分を摂取していたといわれる。

もっともこうしたインガルデンの回想は、多分に我田引水的で、フッサールがしだいに超越論的志向を強めていった傾向を、フライブルクにおける新カント学派的雰囲気への気がねに無理に関係づけているきらいがないでもない。W. ビーメルに指摘によれば、フッサールがカントの超越論的哲学を学びはじめたのは、1905年ごろとされる。そのころフッサールはカントの『純粹理性批判』の名をあげて、現象学も超越論的現象学とならねばならないという自覚に達している(Hua. II., S. VII-VIII 参照)。ともあれインガルデンには、『論理学研究』時代のフッサールを基礎にして、存在論を介して後期フッサールの拓いた現象学的世界にわけいってゆこうとする気概がある。

だがこうしたインガルデンの傾向はかれのひとりよがりの現象学解釈なのではない。それは1905年ごろから徐々にフッサールのまわりに集まり形成されはじめていたいわゆるゲッティングゲン・グループの全体的問題意識でもあった。既に1901年にゲッティングゲン大学に就任していたフッサールははじめほとんど弟子らしいものをもっていなかったが、1905年ごろからミュンヘン大学にいたリップスの門下生たちが師の感情移入の哲学に叛旗をひ

るがえして、徐々にフッサールのまわりに集まりはじめていた。かれらのリップス批判の直接の典拠となったのは、フッサールの1901年に公刊された『論理学研究』であったことはいうまでもない。フエンダーはそのままミュンヘンに残り、独自の現象学を展開したが、アドルフ・ライナッハはゲッチンゲンに移住し(1909年私講師に就任)、マックス・シェーラーが登場するまでこのグループの精神的支柱であった。そのほかにモーリッツ・ガイガー、テオドル・コンラド、デイトリヒ・フォン・ヒルデブランド、ヘドヴィヒ・コンラド＝マルティウス、アレクサンダー・コワレ、ヤン・ヘーリング、エディト・シュタイン、フリッツ・カウフマン、少し遅れてマックス・シェーラー、さらにロマン・インガルデン等がいた。シュビエーゲルベルクはこのグループの性格についてこうのべている。

「このグループにとって<現象学>とはフッサールがこのころ意図していたもの(『現象学の理念』(1907)にうかがわれる意識の超越論的性格への関心——筆者註)とはむしろちがった意味をもっていた。すなわちかれらは現象学的基底としての主観性に向うのではなく、<事象(Sache)>に向っていた。この場合<事象>とは諸現象の全域の意味に向けられ、大抵は客観的なものを志向し、主観的な意味合いをもつものではなかった。フッサールの現象学はかれらに自立した哲学的活動に対する根拠を与え、心理物理学的理論の障害をはらいのけ、貧困化した実証主義をのりこえさせた。いまかれらは自由に新しい諸現象の広く拓かれた領野を徘徊し、それまでは知られなかった<直観>によって、それらの本質構造とそれらの本質的結合関係を探求せんと努力した。……このグループにとって現象学とはまた第一に本質についての普遍哲学(本質現象学Wesensphänomenologie)を意味し、「意識の本質研究」にとどまることはなかった。こうしてかれらの現象学にはフッサールの意味での存在論が含まれていたといえる。フッサールがはじめて現象学的超越論の立場を鮮明にしたとき、かれらはすっかり動揺してしまった」(H. Spiegelberg: The phenomenological movement, Vol.1, p. 170)。このグループは第1次大戦とフッサー

ルのフライブルク移住のため、分解してゆく。1917年ライナハ死去。このグループのうちで最後までフッサールにつきしたがったのは、エディト・シュタインとインガルデンだといってよい。

したがってインガルデンの書の中でまったく独自といえるものは、さして多くない。ただかれがゲッチンゲン・グループが求めていたものを、純化し整理して、統一的に示したことは事実であり、その過程でなお曖昧にかくされていたものに斬新な光があてられていることも疑うべくもない。

3. 志向的对象性としての文学的芸術作品

インガルデンが『文学的芸術作品』を執筆した当時、文芸学はいまだ心理主義的残滓を拭いきれずにいた。文芸作品を他の文書的作品から区別するときにも、大抵は詩人の想像力や作品から触発される読者の印象体験の次元に還元して行われるのが普通であった。リップスの感情移入美学に反撥したプエンダー等の現象学と身近に接していたインガルデンの問題意識もまずは反心理主義にあった。かれはこう回顧している。

「兩大戦間の時期にさまざまな国において文学研究の方法論領域での活発な運動が起った。だが同時に個々の作品の具体的研究にあっては、その文芸作品観はてんでばらばらであったし、このことのために研究方向や個々の芸術作品のちがいはきわめて顕著であった。今世紀のはじめになってもあいかわらず活気を呈していた美学（とくにドイツ美学）の心理主義的傾向——Th. リップスや J. フォルケルトの——やデルタイの心理学とその歴史主義の余波をうけて、依然として他の問題領域、とりわけ歴史色をおびた詩人の個性心理学へと脱線していた。ただ徐々にではあるが、文学研究の領域でも、フッサールの反心理主義やいままでとはちがった美学の方向づけが抬頭しはじめていた」(Ingarden : V. E. d. l. Kw., S. 1)。

文芸理論においてこうした反心理主義的立場をはじめて標榜したのは、ゲッチンゲンでの同僚であった W. コンラッドである、とインガルデンは指摘している。「私の知るかぎり、文学作品を純粹にそれ自身として考察せ

んとする最初の試みを、W. コンラッドはその『美的対象』(„Der ästhetische Gegenstand“, in : Zeitschr. f. Ästhetik, Bd. III-IV) という論文の中で行った」(D. I. Kw., S. 3)。だがそれは当時まだ正当に評価されるにいたらなかった。あるいはコンラッド＝マルティウス女史も、理念的対象の「存在様式の自律性」を強調し、文学作品をもこの理念的対象の列に加えようとしたし (ibid., S. 7)、マックス・シェーラーも精神的文化の所産の同一性を承認している (ibid., S. 13 参照)。

インガルデンもまたこの方向線上にある。「われわれがここに (『文学的芸術作品』において) 設定する目標は謙虚である。われわれはさしあたり文学的作品の〈本質自律性 (Wesensautonomie)〉だけを明かにしたい。そのあとではじめてここでなされた主要な成果が美学的考察への道をひらくことになろう。今日さまざまな側面からとりあつかわれる特殊に美学的芸術論の問題はわれわれの考察外に置かれ、のちになってはじめてわれわれの成果の反省の上に立って着手されねばならないであろう」(D. I. Kw., S. 2)。

だがコンラッドの美的対象を理念的対象とみなしてしまうみかたは、その対象の自立性を強調するあまりの刃み足であった、とインガルデンは批評する。「〈美的対象〉を理念的対象とするかれの考えかたは……支持しがたい。コンラッドは『論理学研究』でのフッサールの立場の影響をあまり強くうけすぎていて文学的作品の独特の存在様式をとらえかえすことができずにいる」(ibid., S. 29)。もっともコンラッドは同じ理念的対象といっても、たとえば数学的对象と文学的作品とのありかたのちがいに感じていたが、文学的作品の「異質的諸層のポリフォニー」というありかたに気づいていなかったために、そのちがいを明確にしえなかった。

インガルデンは文学的作品をコンラッドのように「美的対象」とはせず、さらに根源にひきさがって「志向的对象性 (intentionale Gegenständigkeit)」という新たな対象領域にいれようとする。かれによればこの対象領域こそ美学的あるいは文芸学的領域の前提となっている層であり、

志向の対象性とはまさしくこの基底部の存在性格なのであり、異質の諸層のポリフォニーはこの基底部の存在構造ということになる。だがこうした志向性、あるいは志向の対象性という考えかたは、自分がはじめて発見したのではなく、フッサール、プフェンダー、さらにさかのぼればブレンターノ、トワルドフスキーの研究に依拠して学びとったものである、とインガルデンは註記している (ibid., S. 123)。ついでにいえばインガルデンが志向性の概念の創始者の列にポーランドの論理主義者で、記述的心理学を企図していたトワルドフスキーの名をあげていることは、興味深い上に、インガルデンの思想の系譜をよく示しているものと思われる。

さて志向の対象性としての文学的作品は美的体験の対象である前に、認識の対象である。つまり美的価値のあるなしにかかわらず、文書による作品はすべて本書の対象となる。「われわれは芸術的あるいは文化的価値の高い作品だけを文学作品だと考えているわけではない。……われわれはさしあたりなにが価値ある作品と価値のない作品とを区別しているのか、また特定の作品が価値とりわけ文学的価値をもっているとは本来どういう意味なのか、を知らない」(ibid., S. 4)。だからさしあたりホメロスの『イリアド』やダンテの『神曲』やシラーの戯曲やトーマス・マンの長篇小説のような文学の古典と目されるものだけでなく、大衆娯楽誌に載る推理小説や読切物や学生たちの作る月並みな恋歌なども同等の資格で文学的作品として救いあげられる。そればかりでない。新聞の政治経済記事や科学的著作等も文学的作品から排除されたりしない。

ところでこうしたインガルデンの姿勢に対して価値こそが文芸作品の本質であり、これを第二義的なものとするのはそもそも文芸作品のありかたを拒むものだとする批判がただちに行われた。前述のウェレク等の批判もまたこの点において軌を一にしている。だがもっとも直接にインガルデンを攻撃したのは R. オーデブレヒトであった。かれはこう批判する。「われわれは評価しつつ (wertend) <事象> に向っているが、それでいて価値そのものを対象にすることはできない。それをするには、いまもう一度、

独特の〈対象化的〉転回 („vergegenständlichende “Wendung) が必要である。だがこのことはすべての現象学者によって看過されてきた。かれらは心理主義に対する神経過敏なまでの不安にかられて美的体験を排去してしまい、あたかも価値とは（リッケルト学派がその仮定していたように）搬送者に〈附着し (haften)〉して、この搬送者から離れていることができるものだと思っているかのように、中性的な価値搬送者 (neutraler Träger) を研究しているのが現状である。この基本的な誤謬から文芸作品についてのロマン・インガルデンの労作も解放されていない。文書的作品の多層的構築についての犀利な研究も……美学的に考察すれば、空中に漂っている。われわれは作品をまず端的に表象可能なものとして、そしてそのあとで価値充實的なものとして考察したりはできない。けだしその場合ふたつの異なった〈対象〉が問題になるからだ。芸術作品と考えられるひとつの対象のもとでは二重の志向 (die doppelte intentio) に眼をすえることが重要である」(R. Odebrecht: Ästhetik der Gegenwart, S. 25ff. in: D.l.kw.)

こうした批判に対してインガルデンは、フッサールも自分も別に作品を二つの別の対象に見たてて、まず価値中立的な対象を、つぎに価値的对象を扱おうとしたことはない、と反論する。「文書的作品はさしあたり同一の骨格 (das identische Skelette) にすぎない文書的作品は、その都度具体化されつつ、完全に構成されてゆく」(D. I. Kw. S. 5)。かれはこの「同一なる骨格」を純粋認識的にとりあつかわなければならず、価値はこの骨格の具体化において問題になってくるのだとする。オーデブレヒトの反論ではだから作品の層構築の問題と作品の具体化の問題とが混同されていることになる。ただしこの反論に対する再反論が当然予想されよう。つまり作品自体にそなわっていると思われる価値と読者がある程度恣意的に行う評価とは区別すべきであって、前者の価値は具体化以前に作品そのものにそなわっているものではないかと。だがこの問題はインガルデンの具体化の概念が明確になったときふたたび問われるべきであろう。

だが価値問題についてのインガルデンの所論を検討する上で念頭に置いておかねばならないことがある。今世紀初頭、価値論を前面におしだしたのは新カント学派の中でもリッケルトであり、先にものべたように、フッサールのフライブルク移住の前後の事情からもある程度察せられることだが、インガルデンがこのリッケルトを中心とする新カント学派に対して極端な対抗心を抱いていたことも考慮に入れておく必要がある。さらにインガルデン自身、論理主義の洗礼を受けていたこともあわせ配慮すべきであろう。

しかしながら、全体的に見るならば、今世紀に入り、とりわけ深刻な価値観の動揺がおこっているという精神的状況も見逃せない。インガルデン自身意識しているかいなかは別として、論理実証主義や現象学はまさしくこうした価値観崩壊の現実立って、なおかつ確実なものを追い求める運動であった。実際に今日価値の存在を無前提に信ずる研究者や思想家はなにほどこ旧態墨守の感を免れない。オーデブレヒトの美学上の主著『美的価値論の基礎』(R. Odebrecht : Grundlegung einer ästhetischen Werttheorie)もまたその例外ではない。(未完)

参 考 文 献

- R. Ingarden : Das literarische Kunstwerk, 2Auffl. 1960.
 — : Untersuchungen zur Ontologie der Kunst, 1962.
 — : Vom Erkennen des literarischen Kunstwerkes, 1968.
 — : Erlebnis, Kunstwerk und Wert, 1969.
 — : Der Streit um die Existenz der Welt, 2Bde., 1964.
- R. Odebrecht : Grundlegung einer ästhetischen Werttheorie Bd. 1., 1927.
- 大西克禮：現象学派の美学、昭和12年
 竹内敏雄：文芸学序説、昭和27年
 金田 晋：「文芸学における解釈の問題」（「美学新思潮」第2巻『芸術の解釈』所収）、昭和40年
- E. Husserl : Briefe an Roman Ingarden mit Erläuterungen und Erinnerungen an Husserl, Phaenomenologica 25.

H. Spiegelberg : The phenomenological movement, Vol. 1, Phaenomenologica
René Wellek & Austin Warren : Theory of Literature, 3ed., 1956.

Max Rieser : Roman Ingarden and His Time, in : The Journal of Aesthetics
and Art Criticism, XXIX, 4, 1971.

本拙稿は1971年に脱稿したものである。今日、当時にくらべるとインガルデンの思想ははるかに専門研究者の間に知られている。この数年間にロマン・インガルデンの訃報(1970)ももたらされ、各国の美学関係の年報誌において多くの追悼文が載せられた。そうしたことからインガルデンについてそれまであまり明瞭ではなかった種々の思想側面も徐々に明らかになり、またかれの数多いポーランド語論文の独訳書もつぎつぎに出版されている状況にあり、こうした新しい局面の中でかれの文芸理論を考察し直さなければならない時期に来ている。したがって本拙稿はいくぶん時代に遅れている感がないでもない。だが『文学的芸術作品』の内容についてはある程度紹介されているものの、その論を理解する上で今日でも困難視されているフッサール現象学との関係、また当時文芸理論の潮流の中での意義について照明をあてているという点で、一定の意味があると考えたので、ここにあって無修正のまま掲載してもらうことにした。

なお、近年ある事情があって、戦前の国語教育の指導的理論家垣内松三氏の諸論文に詳しく接する機会があったが、かれが文学理論、形象理論を形成する上で、インガルデンの『文学的芸術作品』をよく批判的に摂取されていることを知り、その世界に先がけての進取の精神と、理解の透徹性に驚嘆したことを、ここにつけ加えておく。

Die Literaturtheorie Roman Ingardens

Susumu KANATA

R. Ingarden, ein phänomenologischer Ästhetiker, erklärte die polyphonische Struktur des literarischen Kunstwerkes im "Literarischen Kunstwerk" und eröffnete im Kreis der Germanistik einen ergebnisvollen Weg zur Werkpoetik, die heute bei den Literaturforschungen einen vorauszusetzenden Grundgedanke gebildet haben soll. Der Verfasser untersucht in dieser Arbeit, wie Ingarden diesen Gedanke unter dem Einfluß der Phänomenologie E. Husserls in Göttingen-Periode in Angriff nahm, und welchen Sinn seine Theorie für die damaligen und heutigen literaturwissenschaftlichen Situationen haben soll und sollte.